

子ども期の逆境とレジリエンスを考える

- 企画・司会： 菅原ますみ（白百合女子大学教授）
話題提供1： 舟橋敬一（埼玉県立小児医療センター部長）
話題提供2： 小川淳子（チャイルド・リサーチ・ネット）
話題提供3： 御園生直美（白百合女子大学専任講師）
話題提供4： 安藤智子（筑波大学教授）
指定討論： 榎原洋一（お茶の水女子大学名誉教授、日本子ども学会理事長）

【企画主旨】

極度の経済的困窮や虐待、両親間の不和・暴力、劣悪な保育・教育・地域環境などの逆境（adversity）は、日常生活のなかで持続的なストレスを子どもたちに与え続け、幼いほど自力で抜け出すことが困難です。2021年度の児童虐待相談件数は207,659件に達し、少子化が進行するなかにあってもなお、過去最多を更新し続けています。様々な研究から、困難を抱える子どもたちの家庭的背景には、多様なリスク要因の累積が親子それぞれの生育歴に複雑に絡んで存在していて、世代を超えた影響性が浮き彫りになってきています。傷ついた人々の回復を促進して逆境の世代間伝達を防いでいくことはわが国においても急務であり、リスクとレジリエンス両者の影響に関する統合的なエビデンスを積み上げることで、より有効な政策や制度の策定に貢献することが発達科学領域の研究者に強く求められています。

本シンポジウムでは、関連する国内外の研究や調査結果について紹介するとともに、レジリエンスの中核を成す乳幼児期での愛着に注目した小児期のトラウマからの回復支援の理論や、養育者－子ども関係形成を支援するプログラムの実際についてみていきます。

小児期逆境体験の長期的影響性とレジリエンス・プロセス

菅原ますみ

（白百合女子大学人間総合学部）

近年、予防医学で始まった虐待等の逆境的小児期体験（Adverse Childhood Experiences: ACEs）と成人期以降での心身の健康問題との関連についての研究が関連諸領域でも急速に増加している。発達心理学では、伝統的なACEsが対象とする家族関係の逆境要因に加え、貧困やいじめ・劣悪な学校/地域要因などより広範なリスクの蓄積（Cumulative Risk: CR）に着目するとともに、逆境体験のネガティブな影響を緩和する保護的・補償的体験（Protective and Compensatory Experiences: PACEs）に注目し、回復に関するレジリエンス研究が発展しつつある。本報告では、逆境的小児期体験（ACEs）とその影響の予防・回復に関する保護的・補償的体験（PACEs）に関する国内外の研究について、報告者らのグループの研究結果を含めて包括的に紹介する。

子ども期のトラウマへの支援

舟橋敬一

(埼玉県立小児医療センター)

子どもは愛着対象とのやり取りを通じて、自分と他人に関する理解をまとめ上げる。共感されること、慰められることを通じて感情を理解しコントロールできるようになる。何が危険で何が危険ではないかと言うことを理解し、自律神経をコントロールできるようになる。小児期逆境体験はこの獲得自体を妨げるのであるが、養育によってこのコントロールが一旦獲得されても、生命の危機を感じるほどの緊急事態においては、考える脳をいわばオフラインにして、生存本能の反応に任せるしかなくなる。つまり、過剰に反応した交感神経に従って、闘争・逃走となるか、過剰に反応した迷走神経に従って動けなくなるかである。トラウマ体験の後、些細なことを危険と感じるようになり、一度獲得したコントロールが崩され、さらにそのような自分を否定的に認識するようになる。これがトラウマ反応である。

トラウマ治療に関してハーマンは安定化、トラウマ記憶の処理、統合の3段階を提唱している。トラウマ記憶を処理するには安全を感じていることが前提であるからだが、そのために何が必要なのかというと乳幼児期に愛着対象との関係で学習した、あるいはすべきだった自律神経と感情のコントロール、そして自己の感覚なのである。ボストンのトラウマセンターで開発されたARC (Attachment, Regulation, Competency) 理論を用いてその介入を紹介する。

コロナ禍における子どものウェルビーイングとレジリエンスの育成について

—「子どもの生活に関するアジア 8 か国調査 2021」分析結果からの検討—

小川淳子

(チャイルド・リサーチ・ネット、ベネッセ教育総合研究所)

先行する調査や研究で、コロナ禍の長期化によって多くの子どもが心身に不調を感じ、「ウェルビーイング (心身の良好な状態、幸福)」の実現が脅かされていることが明らかになっている。そこでチャイルド・リサーチ・ネット (CRN) では、日本を含むアジア 8 か国の共同研究者とともに、コロナ禍における子どものウェルビーイングの状況と、その実現に必要と考えられる「レジリエンス (困難な状況に適応して回復する力)」に着目した調査を企画し、2021年8～11月に実施した。

本報告では5歳の子どもをもつ母親の回答データを抽出して行った分析に焦点を絞る。分析結果より、コロナ禍において、子どものウェルビーイングには本人のレジリエンスが強く関連していることが明らかになった。8か国の全体データでの分析だけでなく、国別分析でもすべての国において同様の結果が得られた。そのレジリエンスの育成につながる要因について、日本のデータを分析した結果、子どもにとってもっとも身近な存在である「家庭 (保護者)」と「園 (保育者)」の両輪でのサポートが重要であることが分かった。さらに、子どものウェルビーイングやレジリエンスには母親の応答的な養育態度や子育て肯定感が関連していたが、これらの母親変数にも「園 (保育者)」のサポートが関連していることが明らかになった。本発表では上記の分析結果について詳細に報告する。

社会的養護における乳幼児の支援

—Watch Me Play! プログラムの実践—

御園生直美

(白百合女子大学人間総合学部)

社会的養護のもとにいる乳幼児は、人生早期に虐待や養育者との分離、喪失を体験しており、アタッチメントやトラウマの問題を抱えていることが少なくない。こうした場合、できるだけ早期に適切な支援を行うことが非常に重要になってくるが、実際にはそうしたサポートは、子どもの問題が表面化してくる就学後や思春期まで行われないうのが現状である。

こうした子どもたちへの早期の支援として英国 The Tavistock & Portman NHS で開発された Watch me Play! (WMP) プログラムがある。このプログラムは、子ども主導の遊びに養育者が十分な注目を与えることを目的としたシンプルなものであり、無料で誰でも実施可能で、英国では今や社会的養護の子どもたちだけでなく、10代の親や、障害を持つ子どもの親など、さまざまな分野で使用され始めている。現在 WMP のマニュアルは 11ヶ国語に翻訳されており、日本語版も無料で公開されている。

当日は Watch Me Play! プログラムの紹介と、日本での実践が始まった乳児院、里親、養子縁組家庭への導入の状況と研究調査の一部について報告する予定である。

アタッチメント理論に基づく親子関係の介入プログラムの紹介

—「安心感の輪」子育てプログラム実践からみるレジリエンス—

安藤智子

(筑波大学人間系)

人生早期の養育者との関係が、子どもの社会情緒的発達に影響することは、多くの研究で明らかになっている。アタッチメントを1歳で測定し、その後の発達を追った縦断研究の成果により、良好なアタッチメント関係は、良好な発達の帰結となることも示されてきた。この研究成果をもとに、乳幼児の養育者向けのプログラムがいくつも開発され、エビデンスも検証されてきた。そして、これからはプログラムを必要な親子に届けるために、社会的に実装する段階に入ったと考えられている (Berlin, 2016)。

「安心感の輪」子育てプログラム (Circle of Security Parenting) では、子どもの行動から、その動機であるアタッチメントに関する欲求を推測することや、欲求に寄り添うことについて図や映像を用いて体験的に学ぶとともに、ファシリテーターや参加者との対話や内省を通して、子どもとの関係や被養育経験、養育者自身の行動について振り返る時間をもつ。

ファシリテーターは、養育者のネガティブな感情に寄り添い調整する安全な避難所の機能や、養育の試行錯誤自体に価値があると励まし、見守り、必要な手助けをする安心の基地の機能を果たすように努める。養育者のアタッチメント対象として機能し、欲求を尊重する体験を提供しようとするともいえるだろう。

シンポジウムでは、最後に「安心感の輪」子育てプログラムでの養育者の変容についても触れる。